

「外国語教学」⁽¹⁾ の原点

—— 中国語を例に ——

奥田 寛

「そこで諸君は、耳と口、口と耳、この二つが英語を習ういちばん大切な道具だということを、決して忘れないでください、ようござんすか、耳と口、口と耳！
くどいようだが、ことばは音ですよ、音ですよ！」

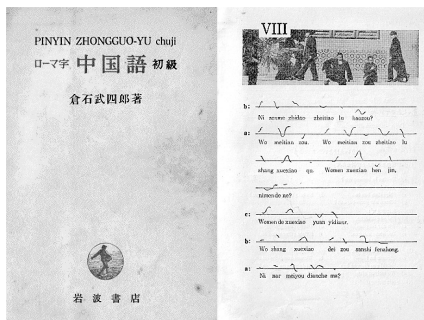
(岡倉由三郎『岡倉先生初等英語講話』より)*

0. はじめに—「ことばの本質は、音声である。」

言語学者趙元任氏⁽²⁾は、かつて『语言问题』⁽³⁾の中で「ことばの本質は、音声である。」⁽⁴⁾と述べた。このことばにしたがえば「普通話」(「標準中国語」。以下「中国語」と呼ぶ)の学習においても、初学者は最初に中国語の「音声」を発するために欠かせないツールとして「発音記号(声調記号も含む)」(具体的には「ローマ字拼音(ピンイン)」)を正確、かつ確実に習得する必要がある。そして発音記号で表記された中国語の「単語、フレーズ、文」からその意味を理解する。次の段階でそれらの「漢字」表記(「簡体字」や「繁体字」)を覚えていくのが、中国語学習の自然な順序であろう。倉石武四郎氏⁽⁵⁾は著書『中国語五十年』の中で「中国人はまずこの言語(方言も含めた広い意味での「中国語」)を(音声で:筆者付加)修得し、ある年齢に達してはじめて漢字を覚える。その言語は漢字によらずして、中国の全土にふりまかれている。」⁽⁶⁾というように中国人の言語習得の過程をいみじくも述べられた。我々も小学校に入学する前は「ひらがな」、「カタカナ」や「漢字」を知らずに一定の日本語の会話能力を身につけていた。小学校に入学して初めて日本語の表記体系をおぼえたことを記憶している。この言語習得の流れはアメリカの中国語教育現場において実践されていた。筆者がアメリカの大学⁽⁷⁾で中国語の教育実習を行っていた時に見聞した。研修先の大学で使用されていた中国語の「入門教科書」は、漢字表記がなく、すべて「ローマ字」による「拼音(ピンイン)」表記で書かれていた。アメリカ人学生はそのような体裁の教科書を用いて中国語を学習していたが、彼らの発音、聞き取り能力、会話能力は、明らかに日本の大学の入門課程の学

生よりも高いレベルにあった。このことは、入門段階で「ローマ字拼音（ピンイン）」表記の教材を用いることが発音、聞き取り能力を身につけるツールとして効果があった証左の一つとして考えられる。これはアメリカ人学習者（欧州などの言語がローマ字表記の国の学習者も同様）にとって母国語の英語の表記が「ローマ字」であったことが中国語の学習に有利に働いたとも考えられる。一方、日本人学生は入門段階から中国語を「漢字」、「ローマ字拼音（ピンイン）」併記の教科書を用いて学習している。両者の学習教材の体裁の違いは、中国語の「音声」が聞こえた時、即座に「音声」でその「意味」理解しようとするアメリカ人の反応と、「音声」が流れてきた時、頭の中の「黒板」に「漢字」を思い描き、それを読んでその「意味」を理解しようとする日本人の中国語の反応の遅さに表れている。中国語理解のしかたや中国語に対する反応速度が違ってくるのである。中国語音声の意味理解のプロセスが、アメリカ人と日本人と異なる背景として、日本語は一般的に「漢字かな混じり文」で表記され、「ローマ字表記」で表すことはまずない。そのような日本の表記体系が影響して、日本人学習者が特に入門段階の中国語学習において「ローマ字拼音（ピンイン）」よりも「漢字」（正確には「簡体字」）から中国語の意味を理解しようとする（もちろん中国語

は本来漢字表記であるから漢字から中国語を理解するのが学習者の最終的な目的なのだが）。日本では倉石武四郎氏が1958年に「漢字（簡体字）」のない中国語教科書『PINYIN ZHONGGUO - YU chuji ローマ字中国語初級』⁽⁸⁾を出版されたことがあった。現在では中国語を「ローマ字ピンイン」のみで表記した中国語教科書は、まったく出版されていない。筆者は半世紀前、学生時代に倉石氏の『ローマ字中国語初級』（『PINYIN ZHONGGUO - YU chuji ローマ字中国語初級』の後身として出版された）という漢字ではなく「ローマ字拼音（ピンイン）」で表した教科書で中国語を学習し、ローマ字表記からストレートに中国語の意味をイメージする練習をしたことがあった。「音声表記➡漢字➡意味の連想」という流れではなく「音声表記➡意味の連想」という流れを自身に習慣づけようとした。中国でも1950年代、「普通话」（「標準中国語」）普及活動の一環



『PINYIN ZHONGGUO - YU chuji
ローマ字中国語初級』

として「ローマ字拼音（ピンイン）」表記による書籍が出版されていた時期がある。ここにも「ことばは音声である。」という考え方が反映されていた。

以上のことを踏まえて「中国語教学」を考えた場合、「発音習得」が「出発点」となり、順に「語彙習得」、「文法習得」という外国語習得の流れが見えてくる。以下、二人の言語学者の「中国語教育論」と「対話」をする形式をとりながら話を進めていくことにする。

1. 発音習得について

中国語学習で最初に学ぶのが、「音素」の読み方である。具体的に言うと「子音」、「母音」およびそれらが組み合わさった「音節」の読み方である。中国語には4 1 1の「音節」がある。ここでは、まず二人の言語学者の意見を紹介する。

(1) 倉石武四郎氏

- ① 「どの外国語を学習するにしても、その発音は最も初めにして、しかももっとも困難な関門である。人間の咽喉や口や鼻の構造は、どの民族においても差異がない。いざ言語として発音するとき、それらの器官のどこをどのように使用するか、まったく驚くべき違いがある。中国語を使用する人たちがどの器官をどのようにしているか、中国語の教育にあたる人、またこれを学習しようとする人たちにとって、これこそ十二分に把握しないかぎり一歩もすすめない問題である。」⁽⁹⁾
- ② 「ここでただひとつ心配なことがある。現代語（中国語のこと）の初歩を主として拼音によって教授される先生から聞くことであるが、学生諸君が拼音により話しことばを学ぶとき、その進歩はきわめていちじるしい。しかし、やがて漢字のテキスト—それはすべて拼音をふってあっても—をあたえると、とたんに発音がくずれるという。これは初歩で専念に発音を学んだときと違い、漢字を見てその意味をとらえようとして、発音に注意できなくなるからであろう。理論的には、発音が完全にわが物になってからならば、ちょうど中国人が漢字をおぼえていくように、何の抵抗もなくすすめるはずである。…ここに重要なのは、たとい漢字文献に立ち向かう速度を落としても、発音を後退させないことである。そのため発音や声調の復習には、あくまで相当な時間を配当されることがのぞましい。」⁽¹⁰⁾

要点

- (1) 「中国語の教育にあたる人、またこれを学習しようとする人たちにとって、これこそ(①の下線部部分)十二分に把握しないかぎり一歩もすすめない問題である。」
- (2) 「理論的には、発音が完全にわが物になってからならば、ちょうど中国人が漢字をおぼえていくように、何の抵抗もなくすすめるはずである。…ここに重要なのは、たとい漢字文献にたちむかう速度をおとしても、発音を後退させないことである。そのため発音や声調の復習には、あくまで相当な時間を配当されることがのぞましい。」

(2) 趙元任氏⁽¹¹⁾

“我教外国人学中国语言的时候儿啊，我总说：中国语言的音一共 a few dozen，当中一半儿英文里头已经有了，所以啊，你们只需在 one half of a few dozen 上特别注意就行了。这种工作啊，只要开始两三个礼拜就应该把所有的困难都给战胜。因为两三个礼拜要是不给它弄清楚啦，以后你再学到语法，再增加词汇的时候儿啊，你就把这些错的音老用了，所以不能不在最初的时候把这个习惯弄好。这个道理很简单。……最初对于音的本身的学习，是很费劲，很难的，对于以后学东西影响非常大的一个工作。”

(私が外国人に中国語を教える時、いつも彼らに中国語の音は全部で数十あるが、そのうちの半分はすでに英語の中にあるんだ。だから君たちは残りの半分の音に特に注意を払えばいいんだ。このことは始めて二、三週間のうちにすべての困難に打ち勝たなければならない。なぜなら二、三週間でもし片づけなければ、その後、文法の学習に進み、語彙が増えていった場合、いつまでも不正確な発音をすることになる。なので最初の段階できちっと正確な発音を習慣づけなければならない。理由はとても簡単だ。……最初の発音の勉強というのは、骨が折れるし、難しいことで、その後の学習に非常に大きな影響を及ぼす作業だ。)⁽¹²⁾

要点

- (1) 中国語の「子音」や「母音」の中には英語の「子音」や「母音」と「同じ」ものがあるので中国語の「子音」,「母音」のすべてを学ぶ必要はない。「異なる」子音と母音のみに集中して練習すればよい。
- (2) このこと(発音習得のこと)は最初の二、三週間のうちに何とか片づけなければ。なぜなら二、三週間でこのこと(発音習得)に目途をつけなければ、その後の文法学習や語彙学習においていつまでも不正確な音から逃

れられなくなるのだ。なので最初の段階で正確な発音を習慣づけなければならない。理由はとても簡単だ。……最初の発音の勉強というのは、骨が折れるし、難しいことでありその後の学習に非常に大きな影響を及ぼす作業なのだ。

「中国語」の「ローマ字拼音（ピンイン）」の正確な読み方や「声調」⁽¹³⁾の高低アクセントの区別が正確に発音できなければ、中国語の「入り口」でとまったままで学習者はそこから先へは一步も進めない。上述した二人の言語学者は、外国語学習の最初の関門が「発音習得」であり、その発音がいかに後の外国語学習に大きく影響するかを強調している。ことばの起源から言っても最初は「口（音声）」で意志を相手に伝え、相手の音声を手で聞いて理解」していた。その時代を経て「ことばを文字に記録し、その文字記録を読んで理解」する段階へと移っていった。

「発音習得」の重要性について、毎年一回目の中国語の授業の時に受講者に説明をする。しかし、その後の結果を見ると語彙の「ローマ字拼音（ピンイン）」（発音記号）が「簡体字」に直せない（また、その逆も）、また、その「意味」も答えられない。もちろん、しっかりと暗記している受講生は、このかぎりではない。このような結果は、中国語学習の動機や学習目的、またそれらに関係する学習意欲にも関係しているとはいえ、確かに発音記号や声調⁽¹³⁾を覚えるのは、他の外国語にくらべて（例えば英語や韓国語には「声調」がない。日本語には高低アクセントがあるが、それは中国語の声調のような高低アクセントと性質を異にする）面倒で時間もかかる。地道に覚える努力をする必要がある。「ローマ字拼音（ピンイン）」の読みと声調を構成する四種類の高低アクセント記号は、いずれも本来の中国語という「ことば（＝音声）」を視覚化した「かたち」である。また、逆に言えば視覚記号化された「ローマ字拼音（ピンイン）」や声調記号は中国語を音声に再変換する機能がある。その再変換を学習者が反射的に口からついて出るぐらいに「習慣化」しなければ、確実に発音、声調を習得したことはならない。入門期の発音習得には、自身の教学経験から言えば目安として一週間に二コマ（一コマ＝時間三十分）、一月（ひとつき）八コマの授業時間数では「中国語音節表」及び「声調」が正確に発音できる（もちろん学習者の努力に支えられているが）。

筆者は、最近、中国の代表的な方言の一つである「広東語」の学習をはじめた。最初の関門は、やはり上述してきたように「発音」記号と「声調」の読み方、とりわけ広東語の声調は、中国語よりも声調の数が多く（六種類、「中国語」

は四種類)あり、習得がやや面倒である。今回使用した広東語入門書が採用している「ローマ字」発音記号は、日本で広く採用されている「千島式ローマ字」であるが、まずその読み方を覚えなければならなかった。第一段階として入門書の発音要領を参考にしながら反復練習し、同時に付属CDの音声資料を何度も聞いて発音、声調を習得した。先に「最初の発音の勉強というのは、骨が折れるし難しいことでその後の学習に非常に大きな影響を及ぼす作業だ。」と述べたが、学習者はまず発音習得のレベルに到達しなければ、以後の学習は難しいということ、逆に言えば、そのような発音習得レベルに達して始めてさらなる外国語学習継続への自信へとつながる。

現在、筆者は第二段階として「簡単な会話文」で広東語学習を続けている。特にCD音声資料を聞いてその意味がわかったときには「広東語の音の世界」が広がり、興味が尽きない。筆者の今回の「広東語」の学習方法は、半世紀前に中国語学習を始めたころのそれとなんら変わっていない。筆者が今回はじめた「広東語」の学習体験を通じて感じたことは、改めて「ことばは音声」であり、中国語入門者が、中国語学習の持続を望むなら「第一に正確な発音、声調記号の習得に全力を尽くすことが最も重要である」という極めて当たり前のことを常に肝に銘じておく必要があるということであった。

2. 「語彙習得」について

1. で述べたように発音記号や声調記号の習得が基礎となり、語彙の発音が正確にできる。それができると学習者の中国語学習に対する自信が生まれてくる。不正確な発音しかできなければいつまでも学習者の中国語学習は不安定なままである。

語彙習得の方法について、趙元任氏は、「文、フレーズ」を単位として覚えることが文法習得にもつながり、語彙の用法も身につけることができる」という。

“你记的句子越多越好。所以学词的时候儿啊，得要用整个儿的语句，有了若干数目的句子啊，当然你对这个词的用法也就可以会了。⁽¹⁴⁾” (暗記する文は多ければ多いほどよい。なので語彙を覚えるときは、まとまったフレーズや文を使うべきである。ある程度の数の文をものにすれば、あなたは、その語彙の用法もわかるようになるのだ。)

白井恭弘氏も、その著『外国語学習の科学』の中で「単語は文脈の中で覚える」⁽¹⁵⁾ことが重要であると指摘されている。その理由を「文脈の中で単語を覚えるもう一つの理由は、単語そのものの意味以外の情報、たとえばコロケーション（前後にどんな単語がくるとか）とか文法的情報とかも覚えられるということです。これは名詞にも与えられますが、特に動詞の場合に重要です。」⁽¹⁶⁾と述べる。

ここでは英語について語られているが、中国語の例に具体的に挙げてみよう。「他死了。」と「他死了母亲。」という二つの文では、いずれも“死” si という動詞が使われている。前者の文は「S + V」型で“死”は自動詞にあたり「彼は死んだ。」という意味である。後者の文の“死”は「S + V + O」型に現れ“母亲”を目的語にとっている。この“他死了母亲。”という文は、中国語文法では「消失文」と呼ばれ「彼は母を死なせた」のではなく「彼（は、のところで）、お母さんが亡くなった。」という意味となり、“母亲”は文構造では目的語の位置にあるが、動詞“死”の「主体」として扱われる。よってこの“死”という動詞が「S + V + O（有生物）」型に現れた場合「消失文」を構成するという「文法知識」を獲得することができる。以上のことから中国語の場合でも動詞をさまざまな「文（脈）」の中で覚えることはその意味用法及ぶ文法の知識を得ることが可能となる。

語彙は一語、一語逐一的に暗記するのではなく、中国語教材の中の「日常生活を具体的に取り扱った文を数多く暗記すれば、日常的な中国語会話運用能力を身につけるのにつながる。

3. 「文法習得」について

筆者の学生時代の文法学習は、一冊のコアとなる初級教材を隅々まで確実に学習し、暗記することであった。一冊の初級テキストを集中的に学習し、それを丸暗記（その教材の記憶は1年間保持していた）した。そうすることで、学習者の頭の中にその言語の「核」が形成されると思われる。このようにしてきた「核」が一度できあがると、さらなる学習者の持続的学習によってその「核」はだんだんと膨らむ。すなわち「核」が新たな学習によって得られた言語知識を取り込んで大きくなる。それが「外国語能力」が向上するということなのだと思う。

具体的な「文法」知識の習得とは、教材の「文法ポイント」（本文も当然なのだが）などの例文（簡体字、発音記号、意味も）をしっかりと暗記することで

ある。そのあとで暗記した例文を自身で文法的に解釈（理解）できればその文法事項を習得したことになる。「例文を通して文法を学ぶ」（“通过例句学习语法”）ことは母国語の習得過程にも適っている。「二．語彙の学習について」で述べた白井氏の「語彙」はそれが使われている文、フレーズで学ぶことで文法知識が獲得できる」ということである。習得した基本語彙と基本文法を駆使しその範囲内で「かんたんな文」を作ることができれば学習者はそれに喜びを感じ、それが学習者に自信をもたせ外国語学習の継続を可能にする。

趙元任氏は「文法習得」について次のように述べる。

「为使初学的学生学会语法，最好把课本儿这么编：起头儿把词加得很慢，用很少的词来把基本的语法反复的练习，这样子才可以学到“会”的程度。」（初学者に文法をマスターさせるには、教材を次のように編集するのが一番よい：最初は単語をゆっくり増やし、わずかな語彙を使って基本文法を繰り返し練習することで初めて「（文法が駆使）習得できる」レベルになるのである。）⁽¹⁷⁾

4. 「教材」について

(1) 音声資料の利用—聞き取り能力や会話能力が身につくツール

語学テキストには、ほぼすべてに CD の音声資料がついている。教室では二、三回学生に聞かせるだけで十分な時間が取れないことが多い。学生に自習の際に利用しているか尋ねてみるがほとんどが利用していないという。身近に CD 再生機を持たない者も多い。理由はともかく、発音習得、ヒアリング能力向上には、学習者が十分な時間をかけてそれを何度も聞くことが欠かせないのは当然のことである。最近では、CD の代わりに学習者がスマートフォンにオーディオアプリを入れ、そこに語学教材の音声資料（MP3）をダウンロードすることもできる。また、ある教材ではスマートフォンで教材の各課に印刷された「QR（二次元）コード」を読み取らせると指定された WEB サイトに誘導され、スマートフォン上で関連する音声資料が何度でも、見たり聞いたりすることができる。スマートフォンを利用して音声資料の意味が理解できるまで何度でも聞き、また書き取り（漢字や日本語訳に）練習に利用すれば、聞き取り能力や発音能力は飛躍的に向上する。これに関連して倉石武四郎氏は次のように述べる。

「ただ一つ大切なことは、聴取といっても、最初は簡単な単語から始まるが、その単語も文字も読んだだけでは頭にのこらない。もちろん先生のいわれることばのなかから、すぐ生きたことばとして立ちあがってくれない。どうしても音の世界のなかで刻みこまれたものでなくてはならない。ただヨーロッパの文字は、どのみち表音であるから、これを音として立ちあがらせることは比較的たやすいが、中国語を漢字で記憶している人には、たとい漢字の音を知っていても、この溝をこすことがむずかしく感じられるにちがいない。⁽¹⁸⁾」

われわれ日本人が、日本語で会話しているとき相手の日本語の音声を聞いて反射的にその意味を聴き取り相手に「音声」で返す。その繰り返して会話が成り立っている。そのやりとりの間では「文字」は意識にあがってこない。ちょうど文字を知らない子供たちがしゃべりあっている状況が、「文字」の介在しない「音声」のみのキャッチボールでの会話である。同様の状況が中国人との会話の中でもおこなわれていれば、これが倉石氏のいう「音として立ちあがっている」という状況なのであろう。そうなるためには、やはり中国語入門の時期に中国語の漢字を出さない、中国語「音声」を「ローマ字拼音（ピンイン）」で表記した教材で教え、学ぶ必要がある。しかし、先ほども述べたように現在ではそのような教材は出版されていない。かつての『ローマ字中国語初級』は今や絶版となっている状況では、教室で教える側が「ローマ字拼音（ピンイン）」表記の教材を作成して利用するのも一つの方法である。

(2) 「練習問題」の活用

「練習問題」は、語学教材の各課の最後に配され、その課で学んだ文、語彙、文法知識の復習やヒアリング能力の確認のために用意されている。学習者が文法事項を理解しているか、発音記号が読めるか、聞き取りができるか、日本語を中国語に翻訳できるか（また、その逆）の諸能力を総合的に測る問題が「練習問題」である。また、「練習問題」は何度も反復練習することで「四技能（読み、聞く、話す、書く）能力を学習者に定着させることができる。「練習問題」は、学習者の各課の学習の「完成度」を測ったり「能力向上」の手段と用意されている。同時に学習者は「練習問題」を通して自分の弱点を見つけだすことも可能である。

5. 「暗唱」の効用―「聞き取り」、「文法」能力との相関性

趙元任氏が若いころアメリカの大学に留学していたとき、ドイツ語の授業がドイツ語を英語に翻訳するだけの授業であったという。彼は、その授業の方法に飽き足らず自分で中国の古典学習のようにドイツ語をもっぱら口頭練習によって諳んじるという学習方法をとった。その結果、試験では優秀な成績を修めたという⁽¹⁹⁾。この方法はドイツ語の発音、イントネーション、ドイツ語文法などを直接ドイツ語の文章を口頭で暗記するぐらい読んでドイツ語を身につけたという。彼は、また「外国語を自国語で教えるのは、「言語学」の授業であり、外国語は当該外国語で教えるべきである」⁽²⁰⁾とも述べている。趙元任氏と同様の学習方法を倉石武四郎氏も紹介されている。

第一高等学校の二年生であったとき、ドイツからペツォード先生が着任された。…このペツォード先生は着任後まもなく、われわれの教室にあらわれ、教壇の上をゆきつもどりつしながら、ドイツ語で一時間しゃべっていかれた。しかし、クラスでドイツ語のよくできる者でも、nicht wahr?（ではありませんか）といわれたのがわかっただけというくらいだから、他は押して知るべしである。先生は、その次の時間、みんなに答案用紙をわたして、書取をされるといわれた。しかし、ほとんど書ける生徒はいなかった。それから何ヵ月、ただゲーテの詩を暗記してこいというだけの授業をやっていたが、不思議なことに先生のドイツ語はだんだんわかるようになった。⁽²¹⁾

筆者も学生時代、「中国語会話」を北京出身の王鄂という先生が担当されたが、最初から流暢な北京なまりで1年間授業をされた。最初はまったく聞き取れなかったが、最後には先生の言うておられることが聞き取れるようになったという思い出がある。

その意味では、「語学留学」は最も理想的な外国語学習環境であるといえる。

6. 動機と学習意欲の相関関係

「動機をたかめる」ことが「学習継続」を促し、「学習意欲」を高める。例えば、上位レベル取得を目標にして語学検定試験を受験することは学習動機を高める一つの方法である。

7. まとめ

中国語を学ぶ上で、初学者はまず発音記号をしっかりと習得する必要がある。漢字表記の習得はその次の段階である。中国人は漢字を覚える以前に、まず中国語音声習得する。したがって特に中国語の入門期において日本人の中国語学習者は、漢字とローマ字拼音併記の教材を使用するよりも、ローマ字拼音表記の教材を使用することが中国語の音声習得及び聞き取り能力向上に効果があると考えられる。

* 『岡倉先生初等英語講話 = The royal road to English』(研究社, 1934)²²⁾

注

- (1) 「教学」とは、「教授法と学習法」というふたつの意味で用いる。
- (2) 趙元任 (1892～1982), アメリカの言語学者。音声学, 方言学, 国語運動などの分野で多くの業績を残した。コーネル大学とハーバード大学で学び, のちに清華大学やカリフォルニア大学バークレー校などで教えた。また, アメリカ言語学会やアメリカ東洋学会の会長も務めた。彼の主な著書には『言語学入門—言語と記号システム』や『中国話的文法』などがある。一方, 作曲家としても知られており, 『教我如何不想他』などの歌曲を作った。
- (3) 『趙元任全集』第一巻(商务印书馆, 2002年)に所収。p.126。
- (4) 趙 (2002) p.126。“语言の本身, 语言の质地就是发音, 发音不对, 文法不对, 文法不对, 词汇就不对。”ここでは, 同氏は英語の例を挙げて論じている。
- (5) 倉石武四郎 (1897～1975), 中国語学者, 中国文学者。京都帝国大学と東京帝国大学の教授を務めた。狩野直喜に師事し, 1928年から1930年まで中国に留学し多くの学者や文化人と交流した。清朝音韻学, 現代中国文学, 中国語教育, ラテン化新文字や拼音の紹介などの分野で多くの業績を残した。また『岩波中国語辞典』の編纂者として知られている。また, 漢文訓読に批判的で, 現代中国語音での音読を推進した。
- (6) 倉石 (1973) p.145。
- (7) アメリカ合衆国オハイオ州立大学東アジア言語文学部。
- (8) 倉石 (1961)。
- (9) 倉石 (1973) p.146。
- (10) 倉石 (1973) p.167～168。
- (11) 趙元任 (1892～1982), アメリカの言語学者。
- (12) 趙 (2002) p.126。
- (13) 「声調」とは, 言語において意味の区別に用いる音の高低パターンのことである。中国語の声調には“glide (移動する, 滑る)”の類型が4種類あって, 第1声, 第2声, 第3声, 第4声と呼ばれている。
- (14) 趙 (2002) p.128。

- (15) 白井 (2008) p.172。
- (16) 白井 (2008) p.172。
- (17) 趙 (2002) p.127。
- (18) 倉石 (1973) p.158。
- (19) 趙 (2002) p.125。“我记得大学二年级德文的时候儿，教的并且是个德国人，可是他照着一般美国大学的旧习惯上了整整一年的课，课堂里不听见一整句的德国话，因为他们的习惯是拿教科书来看着德文翻译成英文，学生得翻译，翻译得不对，先生来改，可是我就不管它，我还是用老法子，其实我也不是有什么新的语言学的法子，就还是中国的老习惯，书拿来总是哇啦哇啦的念，就跟背《四书》、《五经》一样。我们以前念英文也是那么念，所以德文也是那么哇啦哇啦的念，念到等考的时候儿，我的翻译的成绩，也不差于我的同班的别人的成绩。”
- (20) 趙 (2002) p.128。
- (21) 倉石 (1973) p.157。
- (22) 岡倉由三郎 (1868年～1936年) 英語学者。兄は美術指導者の岡倉天心、友人に夏目漱石がいる。「英語発音練習カード」を考案し、ラジオや通信教育による英語講座を初めて行い、英語学習ブームを起こした。英語で書かれた著書『The Japanese Spirit』は、イギリスを中心に広く読まれた。東京高等師範学校や立教大学の教授を務め、研究社「新英和大辞典」や「英文学叢書」の編纂にも携わった。彼の名を冠した岡倉賞や岡倉英語教育賞が創設され、英語・英文学・言語学の分野に多大な貢献をした人々に贈られている。

〈引用文献〉

1. 『中国語五十年』岩波書店，倉石武四郎，1973年。
2. 『赵元任全集』第一卷第1巻，商务印书馆，2002年。
3. 『外国語学習の科学』岩波新書1150，赤，白井恭弘，2008年。

〈参考文献〉

1. 『PINYIN ZHONGGUO - YU chuji ローマ字中国語初級』岩波書店，倉石武四郎，1961年，第5刷。
2. 『中国語五十年』岩波書店，倉石武四郎，1973年。
3. 『ローマ字中国語初級』岩波書店，倉石武四郎，1986年。
4. 『赵元任全集』第一卷，商务印书馆，2002年。
5. 『外国語学習の科学』岩波新書1150（赤），白井恭弘，2008年。
6. 『ニューエクスプレスプラス 広東語』白水社，飯田真紀，2019年。

提要

学习汉语，初学者首先必须牢牢掌握汉语的发音符号即拼音。汉字书写的掌握则应放在下一个阶段。因为中国人在记住汉字之前，也是首先要掌握汉语的音声。因此，在汉语教学上，我们认为，在汉语入门时期日本的汉语学习者与其使用汉字和拼音并记的教材，不如使用仅用拼音标记的教材为好。这一点与学习者尽快掌握汉语语音及提高听力有关。